



## 随想

# ヨシ博物館奮闘記

西川 嘉廣（ヨシ博物館館長・ヨシ研究所所長）

琵琶湖の周辺に存在し、琵琶湖（本湖）と水路でつながっている湖を内湖と呼びます。かつて37もあつた内湖は、戦中・戦後の干拓や埋め立てにより次々と姿を消し、その数はおよそ半分に減り、総面積では実に8割が失われてしまいました。

筆者は、現存する最大の内湖である西の湖の水郷の中心地、近江八幡市円山町で生まれました。この水郷には、日本の原風景を彷彿とさせる「豊葦原」が今も残り、四季折々、独特の景観を醸し出します。

私の生家は、江戸時代から先祖代々ここに産する江州葦の卸業を営んできました。私は長男でありながら家業を継がず、故郷を離れ、大学で基礎医学の研究に従事していましたが、平成十二年三月、定年退職とともに郷里に戻りました。さて、第二の人生をどのように過ごすべきかを考えていたところ、ヨシを通して、琵琶湖の環境問題に取り組んでいこうと思いついたのです。

皆さんは実際にヨシを見たことがありますか。今では限られた場所ですが、お目にかかれなくなつてしまいました。私の家の前にはヨシの大群落が広がっており、朝に夕に様々な姿を見せ、心を和ませてくれます。スツとまつすぐに伸びたヨシが風になびくとき、その葉ずれの音は深く心にしみこんでくるのです。

ヨシ（アシとも言う。漢字では、葦、蘆または芦、葦と表記）は、イネ科ヨシ属の多年生草本で、世界の水辺に広く分布し、しばしば大群落を形成します。わが国では、ヨシは、主に葦簀、葦障子、葦葺き屋根などの日常生活の具としてのほか、雅楽の筆簀の蘆舌の材料などに利用されてきました。また、ヨシは実用面からばかりではなく、古来、精神的にも日本人の生活と深くかわりをもっており、それは、破魔矢、追儼の矢、茅の輪、葦粽、御葎流し、葦占（粥占）、京都の祇園祭の芦刈山、葎松明など、現在も続いている神事に

よつて伺えます。古人は、ヨシに強い生命力と浄化作用があると信じていたのです。

ヨシの伝統的な需要は、生活様式の変化や安価な輸入品の影響で激減しています。一方、水質浄化・生態系保全・景観形成・護岸作用といった機能の観点から、ヨシの重要性が最近内外で認識されるようになりつつあります。このため、滋賀県では全国に先駆け、平成四年にヨシを守り、育て、活用するの三本柱からなる「滋賀県琵琶湖のヨシ群落の保全に関する条例」（通称「ヨシ条例」）を施行したのです。同条例では、ヨシを守るために琵琶湖や内湖のヨシ群落を、現況に応じて「保護・保全・普通」の三地域に指定しました。また、育てるに

十年間で30ヘクタールの人工ヨシ原の創出を目指し、種々の植栽法が鋭意検討されたのですが、実際に達成できたのは数値目標の三分の一に過ぎませんでした。ヨシ原を潰すことはいとも簡単なことですが、一度潰したヨシ原を再生するには、多大な年月と費用が必要なのです。現在、ヨシを守り、育てるために様々な地域で植栽事業が行われていますので、今後のヨシ原の復原に大いに期待しています。

しかしながら、なんとこれも現下の急務は、ヨシを活用するにありませぬ。ヨシの新規な活用法として、商品化された「ヨシ紙」と「ヨシ腐葉土」が注目されています。現状では、前者は価格の面で、後者は付加価値の点で、まだ理想的な用途とは言い難いものが

あります。これらの課題を解決するところが、将来のヨシの新たな活用法のステップアップになるのではないでしようか。

さて、話を戻します。帰郷後、私は東近江水環境自治協議会などの住民団体に所属し、一会員としての活動を開始するかわら、自宅敷地内の小さな二階建ての土蔵を改修し、私設の「ヨシ博物館」を開設すべく準備に着手しました。もっともこの博物館は、あくまでも個人的な趣味としてつくろうとしたものであって、一般公開しようなどという気はまったくありませんでした。ところが、これを知った地元新聞記者が、平成十二年十一月二十八日



二階建てのヨシ博物館にはあらゆる分野の資料が展示されている

付の滋賀版に「父の遺志と琵琶湖を愛する気持ちと／博物館開設へ大忙し」の見出しで、また、さらに一カ月後には全域版に「環境保全・情報発信の根、湖国から／ヨシ博物館開設へ奮闘」と題して、いずれもカラー写真入りの大きな扱いで掲載したのです。続いて数々の全国紙や業界紙、さらに英文紙でも取り上げられ、「開館間近」が次々と報じられる騒ぎに発展したのです。そんな矢先、平成十三年一月二十六日のテレビの生放送の番組に出演した際、「ところでオープンはいつですか？」と尋ねられ、とっさのことでもあり、「四月四日がヨシ」と読めるので、その日を目指しています」と思わず答えてしまった。かくして、自ら招いたこととはいえ、私的なつもりであった博物館の《開館》がいよいよのつびきならない状況に追い込まれる羽目になったのです。それから、家族みんなを巻きこみ大わらわで奮闘。かろつじて予告日の開館にこぎ着けることができたのです。

奮闘した結果そろえた主な収蔵品を紹介すると、まず家業で使っていた古道具・衣類・帳簿・引き札、検地の立て札類。ヨシ工芸品、ヨシ紙製品、ヨシの紋様の陶器や漆器などの日常品。ヨシに係る書画・染め物・写真・ビデオ・CD・テープ類。ヨシペ

ンやヨシペン画、様々なヨシ笛、ヨシ舟や葎葎き民家の模型。ヨシに関する内外の文献・書籍およびそれらを参考に筆者がまとめた多数の冊子、祖父や父が残した文書などの資料類。そのほかにヨシと神事とのかわりを示す品々、食品や薬品に関する品、ヨシ炭や藻屑(燃料)、フィンランドの作家によるヨシアートやヨシキリの巣や写真などといったものが所狭しと並んでいます。開館二年あまりで、種類も数も随分増えました。

さて開館してみると、予想に反し全国から来館者が引きも切らず、その対応にうれしい悲鳴をあげる事態になりました。新聞、雑誌、テレビなどのメディアでも度々紹介されるにつれ、来館者数は日ごとに増加していきます。リピーターが多いのもうれしい驚きです。また孤軍奮闘で数カ月が経過した頃から、滋賀県立大学環境科学部の数人の学生がボランティアとして運営に参画してくれるようになり、私としては大いに助かっています。最近では、海外からもツアー客やテレビ取材班が来られるほどで、このささやかな博物

館が、ヨシに関する世界への情報発信基地として機能し始めた感触がしています。

また、ヨシ博物館のお陰で、たくさんいろいろな分野の方々知り合っことができました。こうした来訪者から、思いがけない有益な情報を教えていただいたり、貴重な資料をご恵与いただいたことも一度や二度ではありません。本当にありがたいことで、心から感謝しています。

「人間はひと茎の葎にすぎない。自然のなかでもっとも弱いものである。だが、それは考える葎である」(前田陽一訳)は、『パンセ』にみえるあまりにも有名なパスカルの至言。自然界で最も弱い存在の象徴であると思なされたこのヨシが、実はいま、地球環境の保全のためにたくましく活躍しているのです。筆者は、ヨシ博物館を通して、この事実を少しでも多くの人々に今後も伝えていきたいと望んでいます。そのためにも、皆さんに一度、当博物館に足を運んでいただき、「ヨシ」を見て、触れて、知っていただきたいと思ひます。

#### ヨシ博物館

ご来館の際は、事前にお電話かFAXでご予約いただくようお願いいたします。

T 52330805 滋賀県近江八幡市円山町188番地

電話 0748(32)2177/FAX 0748(32)0570